

東洋と西洋が同じ時間と空間の中ですべての情報を同時に共有し、急速に変化していく今現在、自国の伝統美術を現代の美術に融合させ制作している作家たちが注目を集めている。このような時代の流れにあつて韓国では多くの作家たちによって最も韓国的な絵画として朝鮮時代の宮中装飾画と民画が取り上げられ、現代的に再解釈され表現されている。筆者も韓国人だが、日本で作品制作をする作家として意識的に時代の流れを作品に反映し、自らのアイデンティティを見出すために、伝統に対する考察の必要性があると感じてきた。

本論文では、民画の概念を伝統民画と現代民画に分け、さらに風俗画からモダン民画まで細分化して、今日の民画の多様化について分析した。そして、民画をもとに制作する民画作家二名と制作に民画を借用する現代アーティスト三名を取り上げ、現代民画の特異性を明らかにしようとした。その上で、現代アーティスト三名と筆者の作品の比較を通じて自身の作家としてのアイデンティティと今後の制作方向性について考察してきた。

第1章では、これまでに議論されている朝鮮民画の名称に対する基本的な概念をまとめ、宮中装飾画と民画の関係について考察した。日本人の柳宗悦が初めて使った「民画」という用語は1960年代から韓国でも使われるようになった。民画という言葉が広がってから、多くの学者によってその概念規定の研究が進められたが、いまだ定説をみることがなく、今も、議論の真っ最中である。こうした潮流に対して、筆者は民画の本質論には立ち入らず、初期の民画研究者が誤って民画というカテゴリーの中に属するとした宮中装飾画の中で代表的な《日月五峰図》と《牡丹図》、《十長生図》を例に挙げて宮中装飾画が民画の影響を与えたことを明らかにしようと試みた。これにより、約40年間、民画の中に含まれていた宮中装飾画を今になって明確に分けがたい事情の理由を解明しようとしたのである。

第2章では、伝統民画をそのまま模写する「再現民画」と、伝統民画に創作の要素をそなえた「創作民画」を民画作家オ・スンギョンとイラストレーターソ・ハナを挙げ考察し、現代民画の特殊性について分析した。民画作家オ・スンギョンは、趣味で民画を学んだが、本来の美術監修の仕事に民画を取り入れ、「伝統

絵画ディレクター」という新しい分野を開拓して民画を高級なイメージで大衆に広めている。ソ・ハナは、人々が絵をただ見るだけではとどまらず、簡単に幅広く楽しめる方法を探して、朝鮮時代後期に流行した民画のモチーフを用いて現代的な要素と融合させ「モダン民画」と直接名前を付けたカラーリングブックを出版した。この二人の民画作家を通じて現時代の民画の人気とその多様性について知ることができた。これを基に現代民画の特殊性について分析することで、筆者は、民画そのものは何よりも韓国的な絵画の一ジャンルとして認め、その文化を守っていくことは必要だと考えた。しかし、美術史のコンテクストとは全く異なる形成過程の中で生まれた民画作家は韓国の現代アーティストとは別物であることを明確にしなければならないことも同時に分かった。

第3章では、民画を借用しそれぞれ違うジャンルで活動中の三人の作家とその作品について研究をすることで民画作家との違いを考察した。民画をデジタル化したイ・イナム、伝統と現代、西洋と東洋の異なる価値をともに絵に描いたことで、自身のストーリーを表現したホン・ジョン、最後に韓国の伝統技法で、擬人化した犬をテーマに民画的要素と現代的な要素を融合して表現するグック・スヨンについて論述した。第2章と3章で取り上げた五名の作家は同じ民画というモチーフで表現しているが、個々の実態は全く異なる。オ・スンギョンとソ・ハナは伝統民画をベースに制作している。そして民画というジャンルを一般の人にもっと簡単に楽しませようとする意図がある。一方、イ・イナムとホン・ジョン、グック・スヨンは、それぞれ異なる表現方法で制作し、民画を自分の作品世界を表現するための一つの素材として使用していることを知ることができる。

第4章では、前章までの研究をもとに、自作について分析した。また、第3章で扱った民画を借用した現代アーティストと自身を比較することによって、筆者の作業を再検証してその方向性を考察した。もし日本に留学せずに韓国でそのまま制作を続けたら、《十長生図》をモチーフに使用しなかったかも知れない。本学で留学生活を送ることで他人の視線を意識しないようになり、本当の自分と向き合うようになった。そして韓国の民画を別の視点から見ることができ、

それこそが韓国アイデンティティだと確信を持つことができた。筆者は歴史的に形成されて変わらない民画のイメージと変化していく時代を反映した刻々と変わるトレンドを象徴するイメージを融合して、現代人が日常から感じる小さいけれど確かな幸福の瞬間をユートピアの形を表現することで、鑑賞者に緊張の解消と心の余裕を経験していただきたいと思う。

民画を借用した作家イ・イナム、ホン・ジョン、グック・スヨンの作品と自作を図表で比較してみると、いずれも民画を借用して制作しているが、民画の本来の象徴的な意味をそのまま表現するのではなく、作家の作品世界の表現のための一つの素材として使っていることが分かった。そしてイ・イナムはメディアという3次元的表現技法で自然を複製した絵を再度複製して操作したシミュラクルの虚像性を表現しており、ホン・ジョンはキャンバスに派手な蛍光系のアクリル絵具で自分の経験と想像の世界を表現している。韓国画を専攻した筆者とクァク・スヨンは、伝統の紙（和紙と韓紙）に岩絵具と水干絵具のような伝統材料で現代人の生活姿を隠喩的に表現しているのは似ているが、クァク・スヨンは、現代人の様々な状況を擬人化した犬を通じて諧謔的に表現しており、筆者は現代人の幸福をユートピアで表現している。また、韓国画とは別の日本画の色感と箔技法、そして筆者の独自のコラージュ技法で作品を制作することで、筆者の独特な作品世界を再発見したと考える。

博士論文の執筆をきっかけに、自作に対する基本的考えを整理し、より明確な方向性を認識することができた。けれども、もっと深い自己省察と多様な造形的試みなどまだ多くの探究すべき課題が残っている。今後もこのような自身の制作に対する率直な認知に基づき、安住することなく新たな表現方法の研究と努力が伴われるべきであると考えている。また、現実の経験の中で感じる感情から出発した筆者の制作が現代社会と人間の生における新しい方向を提示し、肯定的な方向へ導く役割になるように絶えず研究し、努力していきたい。